

◎世界規模の「宗教戦争」再燃に懸念も

【C J C＝東京、11/23/2015】フランスの首都パリで11月13日、イスラム過激派組織『イスラム国』による連続襲撃事件が発生した。

世界史を揺るがした数々の「宗教戦争」の再燃を示すような動きも見られる。

世界中に大きな衝撃をもたらした今回のテロだが、パリ以外にも『イスラム国』による攻撃が発生、中東を中心に死者、負傷者が多数出ている。

これまでシリアとイラクにまたがる国家の建設に力を注いできた『イスラム国』が、西側での無差別攻撃に方針を大転換した可能性がある。過激派による暴力の封じ込めという課題が新段階に入った。

国際政治では「文明の衝突」が最も目立つようになるだろうと故サミュエル・ハンチントンが予言したのは1993年。この理論は熱烈な支持者を獲得してきたが、その中には好戦的なイスラム主義者も含まれている。こう指摘したのは17日付けの英フィナンシャル・タイムズ紙。パリで大量殺人の挙に出たテロリストらは、イスラムと西側諸国は避けられない死闘を繰り広げていると考える勢力の一派だとしている。

『イスラム国』は16日、米国の首都ワシントンとイタリアのローマを標的とする攻撃を予告する動画をインターネット上に公開した。パリでのテロと同様の攻撃を行うと警告した。

キリスト教世界も大きな衝撃を受けている。教皇フランシスコは14日、「このようなことを人間が行うとは理解できない」と述べ、非人道的行為だと非難した。特に宗教が正当化の理由になってはならないと強調。犠牲者や家族ら「全ての人々のために祈る」と語った。

世界教会協議会(WCC)常議員会は、パリとバイルートにおける最近のテロ攻撃を14日、強く非難した。中東教会協議会(MECC)は、レバノンのバイルートにある混雑した民間の商店街で12日に起きた爆破事件に対し、同情と怒り、そして同国の平和と安定のために働くという変わらぬ決意を、WCCと共に表明した。

ルーテル世界連盟(LWF)も「LWFはバイルートとパリの襲撃における大規模な命の喪失を非難する」と公式サイトで発表した。

英国国教会ジャスティン・ウェルビー・カンタベリー大主教は、パリのテロ事件を「深刻な悲劇という絶望的なニュース」とし、「被害を受けた人たちと共に泣き、助けと正義を求めて祈る」と述べた。

世界メソジスト協議会も「このテロリストによって動機づけられた多発的な爆破や発砲、そして人質をとるパリ襲撃を非難する」などという声明を発表した。

世界福音同盟（WEA）は、テロ攻撃を非難するとともに、フランスとレバノンのために祈るよう諸教会に呼び掛けている。

大規模テロ事件が発生したフランスでは、政府の国を挙げて喪に服するのに、カトリック教会も加わることを明らかにした。合同プロテスタント教会も、犠牲者への同情とともに、命の力である福音への信頼を表明している。福音同盟（CNEF）も、負傷者と犠牲者の遺族たちへの憐れみと連帯を表すとともに、教会員に対し、犠牲者やフランス全体とその当局を支えて祈るよう呼び掛けている。

【キーワード】 宗教戦争、文明の衝突

終末論

Overview

- ・ 導入的イメージ
- ・ 終末論の具現としての「神の国」
- ・ 終末論の変遷
- ・ 現代における終末論の展開

1. 導入的イメージ

終末論的メッセージは、日常の中に隠れている。
→ 日常と非日常の往復運動、日常の相対化、日常からの脱出

山のあなた (カール・ブッセ作、上田敏訳)

山のあなたの空遠く 山のあなたになほ遠く
「^{さいわい}幸」住むと人のいふ。 「幸」住むと人のいふ。
^{ああ}噫、われひとと^と尋めゆきて、
涙さしぐみ、かへりきぬ。

序 詩

尹 東柱

死ぬ日まで 天を仰ぎ	すべて 死にゆくものたちを愛しまねば
一点の恥ずることなきを、	そして わたしに与えられた道を
葉あいを 縫いそよぐ風にも	歩みゆかねば。
わたしは 心痛めた。	今宵も 星が 風に――むせび泣く。
星を うたう心で	1941.11.20

アニメ・映画

- ・ 風の谷のナウシカ (コミック版)
- ・ 旧世界の終わり、人類の再創造
- ・ 新世紀エヴァンゲリオン
- ・ 人類補完計画
- ・ 映画「ターミネーター」「マトリクス」「猿の惑星」
- ・ 人類の時代が終わり、ロボットや人工知能 (AI)、猿が支配する時代に



2. 終末論の具現としての「神の国」

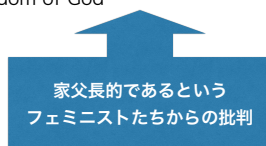
「神の国」とは何か？

- ・ 「神の国」はイエスのメッセージの本質的部分と考えられてきた。
- ・ 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」
(マルコ1:15)
- ・ イエスは、間近に迫った神の国の到来を宣べ伝える終末論的人物として説明されてきた。
- ・ 20世紀における「神の国」：ナショナル・アイデンティティとの結合

「神の国」の言語学的位置づけ

- ・ 「バシレイア・トゥー・テウー」
- ・ 支配→「神の支配」、支配領域→「神の国」

・ Kingdom of God



→ Dominion of God
Reign of God
新しい概念の模索

「神の国」の現在性と未来性

「しかし、わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたがたのところに**すでに**いるのだ」(マタイ14:25)

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国は**あなたがたの間にあるのだ**」(ルカ17:20-21)



「はっきり言っておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決まてあるまい」(マタイ26:29)

3. 終末論の変遷

終末論の起源と系譜

- ・ 神学の起源としての終末論：**イエス再臨の遅延**に対する思索
- ・ 反コスモス的(脱世界的)な「移動」(救済・脱出)の欲求
- ・ **グノーシス主義**において：「この世」→「天上世界」(空間的な移動)
- ・ 個人的終末論の系譜(永遠の生命、死後生としての天国)
- ・ **黙示文学**において：「古い世」→「新しい世」(時間的な移動)
- ・ 宇宙的終末論の系譜(世界の終わり、最後の審判)

終末論の論点

- ・ 「今すでに」と「いまだなお」の間の緊張関係
- ・ A. シュバイツァー「徹底的終末論」：黙示文学的預言者としてのイエスの発見
- ・ J. モルトマン、W. バネンベルク（1960年代）
 - ・ 黙示文学的終末論の再評価、終末論の**社会的次元**の回復
 - ・ モルトマン『希望の神学—キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究』
- ・ 解放の神学、黒人神学などにおける終末論の再評価
- ・ 終末論の**社会変革的次元**の強調

近年の聖書学の成果

- ・ 切迫した神の国の到来を史的イエスに帰することが自明ではなくなってきた。
- ・ 神の国の切迫性は、イエス伝承の編集者に遡るという理解
- ・ 神の国の非黙示文学的解釈の台頭。
- ・ J.D.クロッサンは現在で「知恵志向的」（sapiential）、かつ貧農を中心とする神の国運動にイエスを位置づける。知恵の教師イエス。

4. 現代における終末論の展開

終末論の現代的展開の事例

- ・ オウムによる地下鉄サリン事件（1995年）以降、異常な行動を正当化してしまう異常な世界観として終末論がクローズアップされた。
- ・ オウムはキリスト教の終末論（特に「ヨハネ黙示録」）を利用していた。
- ・ ISの台頭と世界各地からそれに加わる人々の流れ
- ・ **カタストロフィー願望**（耐え難い日常からの脱出）の増大

終末論のポジティブな側面

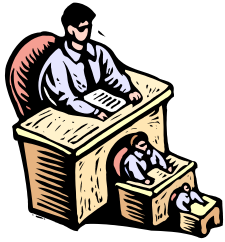
- ・ 「個」の確立
- ・ 自ら責任を負う「個」としての人間を発見する。「個」の強度を育む。
- ・ 社会の現実に対する批判的視座
- ・ **社会変革的次元**へのいざない（解放の神学等）
- ・ 内村鑑三の**非戦論**：再臨思想に支えられていた。



終末論のネガティブな側面

- ・ 最終的な責任を自分以外の権威者や集団にゆだねてしまう（自分で考えない）。
- ・ なぜ、高度な教育を受けた者たちが、オウム流の終末論のとりこになってしまったのか？
- ・ オウムの終末論と、「教育家族」に潜在する終末論は「共振」関係にある。

世俗化した終末論



- ・「しっかり勉強しないと、よい学校に入れない。よい学校に入れないと、よい就職ができない」といった人生行路が親から子に伝授される。
- ・親や教師は、子（生徒）の人生を先取りし、将来を予言する、現代の「予言者」である。

「終わり」の視点

- ・「『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない」（マルコ 13:6-7）。
- ・虚偽の「終わり」に抵抗し、多様かつ豊穡な「終わり」（生きる目的）の視点を獲得していく必要性。

【参考文献】

- ・ 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社、2001年。
- ・ ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス——あるユダヤ人貧農の革命的生涯』（太田修司訳）新教出版社、1998年。
- ・ ユルゲン・モルトマン『希望の神学——キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究』（高尾利数訳）新教出版社、1978年。
- ・ ユルゲン・モルトマン『神の到来——キリスト教的終末論』（蓮見和男訳）新教出版社、1996年。
- ・ リフトン、ロバート・J『終末と救済の幻想——オウム真理教とは何か』（渡辺学訳）岩波書店、2000年。
- ・ 池内恵『現代アラブの社会思想——終末論とイスラーム主義』講談社、2002年。